

復活節集会

福音の原点（三）

——「愛」に根差して生きる——

2015年4月12日（東京）

奥田 昌道

人生は儚く無常 地上の世界は有限 神の側からの呼びかけ 新約の世界——キリストの福音
 どうすれば永遠の世界に入れるのか 新しい戒め 神の「愛」と人の「愛」のちがい

●人生は儚く無常

人生は実に儚く無常であるということは、古今東西変わらない。まずプリント（レジュメ）にあげました。

《一 人間の現実、昔も今も、洋の東西を問わず、変わらない。》

「人は皆、草のようである。その栄はすべての草花のようである。草は枯れ、花は散る。しかし、主のことは、とこしえに変わることはない。」（ペテロ第

一・1・24～25 フランススコ会聖書（旧約聖書・イザヤ書40・6～8、同・詩篇103・14～16）

ここに美しい花がありますけれども、これもいずれ枯れていくわけです。人間だってそうなんです。美しい乙女がやがて年とつて——もうそれ以上は言わないけれども——そういうことなんです。

「その栄はすべての草花のようである。草は枯れ、花は散る。しかし、主のことは、とこしえに変わることはない。」

と。それから、次は詩篇90篇のところですよ。

「われらの年の尽きるのは、ひと息のようです。われらの齢は70年にすぎません。あるいは健やかで、あっても80年でしょう。しかしその一生はただ、骨折りと悩みであって、その過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです。」

（詩篇90・9～10 口語訳聖書）

70年から80年の齢は——今はちよつと寿命が伸びましたから、今はせいぜい90年から100年でしょうということになるかも知れませんが、それにしても——永遠という角度からみたら非常に短いわけです。大自然の永遠さ、悠久さということから見たら、実に瞬間的なものでしかない。しかも、その一生は、「もう幸せで、幸せで」という一生ではなくて、「ただ、骨折りと悩みであって、その過ぎゆくことは速く、われらは飛び去るのです」と。何とも悲しみに満ちた告白ですよ。

それから、代表的なものが「伝道の書」です。



《旧約聖書・伝道の書（口語訳聖書）から》

「伝道者は言う、空の空、一切は空である。日の下で人が労するすべての労苦は、その身に何の益があるか（1:2-3）。

そのすべての日はただ憂いのみであつて、その業は苦しく、その心は夜の間も休まることがない。これもまた空である（2:23）。

「働く者は食ることが少なくても多くても、快く眠る。

これが気に入ったんですよ、「働く者」という。ヒルティも言ってます、

「働いて、しかも神の中にあつて、神と共に働く。これが人間の幸せだ」

ということをやっています。ここでも、

「働く者は食ることが少なくても多くても、快く眠る」

という。ところが、金持ちはいかんと言う。

しかし飽き足りるほどの富は、彼に眠ることを許さない。

ドロボーが入るのではないか、どうしたらいいのかと。この時代に銀行なんてのがあつたかどうか知りません。どうやってお金を貯めていたのかも知りません。とにかく、お金持ちは、その富を奪われないようにと必死になつて目覚めていなければならぬわけです。

……富はこれを蓄えるその持ち主に害を及ぼす。またその富は不幸な出来事によつて失せて行く。

「不幸な出来事」といいますと、四年前の天津波が東北を襲いました。あれでもう何もかも全部流されてしまいましたから。そういうふうにして、不幸な出来事によつてみな消えて失せていく。また、

その人が子をもうけても、彼の手には何も残らない。

親のほうの手には残らない。

彼は母の胎から出てきたように、すなわち裸で出てきたように帰つて行く。

彼はその労苦によつて得た何物をもその手に携え行くことができない。

よく、小池先生は言っておられましたよ。

「向こうへ行くときには何も持つて行けない。聖書だけは持つて行きたいと思つてもだめなんだ。だから、聖書は自分の心の中に、体の中に食べて蓄えないといかん。

何も持つて行けない」

と盛んに言っておられました。

人は全くその来たように、また去つて行かなければならない。……人は一生、

暗闇と悲しみと、多くの悩みと、病と、憤りの中にある」（5・12-17）。

という。

「暗闇と悲しみと悩みと病」、これまではわかるけれども、その上に「憤り」、まだ「プリー怒っている」という。何に対して怒っているんですかね、人間は。これは私は不思議



だなどと思う。大体、年寄りで機嫌のわるいやつが家庭の中では邪魔者扱いされている。居るでしょ。何か知らんけれども怒りっぽい。誰に腹を立てているかわからない。けれども、「もうあんな者には近づかない」とか言って、家族の中では重荷になっているというのがよくある話です。けれども、ちゃんともう何千年も前に書かれているわけです、人間とはこんなものだと。だから、洋の東西を問わず昔も今も、本当に人間の現実是不変ならないという事でここに持つてきたわけです

《参考：新約聖書・テモテ第一書6章6～8節、

「信心があつて足ることを知るの、大きな利得である。わたしたちは、何一つ持たないでこの世に來た。また、何一つ持たないでこの世を去つて行く。

ただ衣食があれば、それで足りるとすべきである」

キリストも、

「明日のことを思い煩うな。まず神の国とその義を求めなさい。そうすれば、すべて必要なものは添えて与えられる。何を着ようか、何を食べようかと何も心配せんでいい」

と言っている。キリストのほうは、

「わたしが責任もつから、あなた方は心配せんでもいい」

と仰つただけけれども。ここではまだそこまでのことは言われていません。要するに、

「人間というのは無一物なんだから、いろんな物を持つとうなんて思わないで、信心があればそれでいいんだよ」

とテモテが言っているわけです。

「ただ衣食があれば、それで足りるとすべきである」

と。そこでまた「伝道の書」に戻りますが、

「日の下で神から賜わつたあなたの空なる命の日の間、

「空だ、空だ」と言っています。そういう本当に無常な中でいいことが一つだけあるよと。それは何かというと、

あなたはその愛する妻と共に楽しく暮らすがい。

これが私は気に入ったんですよ。「愛する妻と共に楽しく暮らすがい」と。そういつて私もそうしていただんですけども、妻も奪いとられてしまいました、残念ながら。どうしてくれるんだと。珍しいですよ、伝道の書の無常観が漂っているなかで、そういう無常な人生なんだけれども、「あなたは愛する妻と共に楽しく暮らすがい」と。これをなさつてなかつたら、みな勿体ないよ、結婚なさっている方々は。旦那さんにこれは申しあげないといけない。男に言つてますからね、「その愛する妻に」と。

これはあなたが世にあつて受ける分、あなたが日の下で労する労苦によつて得るものだからである。



「これだけは大丈夫なんだよ、だから、仲良くしなさいよ」と勧めているわけですね。その次もかなり積極的なことを言っています。

すべて、あなたの手のなし得ることは、力を尽くしてなせ。

どんなに儂い無常な日々であっても、とにかくその日一日のことをしっかりとやれと。どこか「箴言」にもありましたね。

「怠け者よ、蟻ありの所へ行つて学んでこい。蟻は一生懸命に働いているではないかと、そういうことが言われていました。

あなたの行く陰府よみには、わざも、計略も、知識も、知恵もないからである。

今も空の空かも知らんけれども、陰府へ行ったらもつともつと空の空だよ。だから今のうちにしっかりとやるべきことはやれと。奥さんと仲良く暮らせと。そういうふうに言っているわけです。その次も面白いことを言っている。

わたしは日の下を見たが、必ずしも速い者が競走に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つでもない。また、賢い者がパンを得るのでもなく、さとき者が富を得るのでもない。また知識ある者が恵みを得るのでもない。

これで面白いんだよ、決まりきっていたら面白くないと。だから、引つくり返っているところがあるから面白いんだと言っている。でも、その次に書いてあることは深刻です。

しかし時と災難はすべての人に臨む。人はその時を知らない。魚が災いの網にかかり、鳥が罾にかかるように、人の子らも災いの時が突然彼らに臨む時、それにかかるのである。」（伝道9：9～12）

東日本大震災、大津波、そのことを思いました。これが人間の常だということを、もうちゃんと何千年も前にこういう「伝道の書」という書で言われている。昔も今も変わらない。要するに、人生というのは非常に、それだけを見ていれば、無常であり儂くて希望も何もないではないかと。

●地上の世界は有限

そのことをちよつと私は感想として次の頁に書きました。

《Ⅱ 地上の世界（精神の世界も含めて）は有限であり、永遠なるものではない。我らの生命もまた、有限である。死をもつて、すべてが終るとすれば、「伝道の書」の嘆きのごとく、まことに儂いものである。我々は、自身の中から「永遠の生命」（地上の生命を超えて永遠に生き続ける命）を創り出すことはできない。それでいて、我々の内なる（隠れた）願い（欲求）は「永遠なるもの」「地上の生命の終焉とともに終わることのないもの」を求めている。人は、それを遺族や彼を慕う人々の「追憶」の中に生き続けると言ひ、心の中に生き続けるのだと言つ。でも、亡くなった人は、どうなのか。

そんなものは気休めなんだ。その人自身はどうなんだ。残った人は追憶で、ある人のこ



を思い浮かべるかもしれないけれども、亡くなる人はそれで本当に完全にゼロ、何も無いゼロ、靈魂も何もないゼロだということになったら、これはもう本当にやりきれない。空しいと私は思います。

完全に「無」なのか。その人は、「自分の生命は、命は、終わるけれど、残された人の追憶の中に、心の中に残るから、それでよい」として、老後を明るく、生き生きと生きられるのか。完全に「ゼロ」「無」なら、慰霊祭を行ったり、黙祷を捧げたりすることとは、偽りではないか。

これを老人ホームに行つて、一人ひとりにいつぺんお尋ねしてみたいと思う。

「あなたは老人ホームで今、一応この世的なことは守られて幸せでいらつしやるかもしれない。医療機関も整っている。でも、あなたは生き生きとした希望をお持ちですか？ あなたはいずれ終りがきます。それを前にして、いつも生き生きとして喜んでいらつしやるますか？ もし、喜んでいらつしやるとしたら、どんな希望をお持ちなんですか？ それを私は教えていただきたいんです」

と言つて、ずうつとそういう所を回つてみたいと思うんです。何人の方が、

「私はもう行く所は決まっています。おじいちゃんの方にいきます。誰々の所に行きます」

とか言うのは、「天へ行く」という希望ですね、「天国」という。そこまで仰つれば、

「では、あなたはその根拠があるんですか？ それは儚い望みではないのですか？水をさすようであるけれども、それは、あなた、勝手に思いこんでおられるだけではなくて、確かだという証拠はあるんですか？」

と。「意地悪いこと言いなさんな」と言われるけれども。いや本当にそうでしょ。それは思うだけなら自由ですけども、「絶対そうだよ」という、それをはつきりと約束して、だから何があつてもへこたれないで、常に明るく生き生きと生きる。そういうことを約束してくれるものがあるのか。もし、聖書とかキリストとかいうのを抜きにしてね。人間の世界だけで考えたときに。仏教なんか絶対に約束なんかしませんよ。本来の仏教は、

「人間というのは儚い。だから、くだらんことを考えないで諦めなさい。煩惱を捨てなさい。とらわれを捨てなさい。しよせん人間というのは生まれてきて死んでいくものだ。それに執着するのが迷いというものだ」

と言っているわけでしょ。だから、執着なんか捨てて、あきらかにみるというのが「あきらめ」です。実相をあきらかに見なさい。そしたら、人間というものはそういうものなんだから。それを柄がらにもなく「将来の、永遠の」なんていうのは、余計な思い煩いであるから、そんなものは捨てなさいと。それに徹するのが「悟り」というのか何か知りませんが、私はそんなのはとてもついていけない。そんなもので、「ああ、そうですか」なんて引き下がれない。座禅して、「心頭滅却すれば火もまた涼し」なんて、私は熱いわ。ああいうものは、



修行の、悟りの道なんでしょう。でも、それは決して積極的に、

「プラスのものがあから大丈夫だよ。希望がある、生命があるよ。あなたの命はこの地上で儚いかもしれない。でも、儚い命の中に儚くないものがあるんだ。これを持ってきてくれたのがキリストだよ」

と。そういう非常に積極的な、もう後からドーンと押して、支え押して前進させてくれる、そういう力。これを私はキリストにおいて戴いたけれども、キリスト抜きでそんなものがいったいあるんでしょうか？ それを私はここで問にかけているわけです。もしも人間が、肉体が死をもつて終わって、あとは灰になつて、それであとは何もない。完全にゼロ、靈魂も何もありませんということならばね。でも、皆さんは黙祷をなさるではないですか。慰霊ということをなさるではないですか。

天皇陛下もペリリュー島という所へ行つて、祈りを捧げて来られた（2015年4月）。長い間そのことを願つておられてやつと実現したという。私は非常に尊いことだと思う。やはり人間というのは、^{からだ}体が無くなつた、体の自然の命が終つた、それで完全なゼロではなくて、靈魂というのが存在する。靈魂というものが彷徨^{さまよ}つていないようにお坊さんがお経をあげて、成仏するという。つまり、靈魂というものが彷徨^{さまよ}わないで、ちゃんと行くべきところへ行つて、そこで安らかであるようにという。それが黙祷を捧げたり、追悼のいろんな行事をやつたり、祈りを捧げるといふことなんです。これはもうどんな宗教にかかわらず、日本ではやつてますよ。原爆の日とか終戦の日とか、そういう時に黙祷を捧げたりします。非常に自然なことをなさっている。だから、そこを更に深くつつこんで、

「慰霊というのはどういうことですか？ 慰霊でどういう霊をどういうふうに慰めるんですか？ あなたは無神論をやっていましたね。人間は死んだら終わりだと言つてました。それと今やつてなさることとはちゃんと調和しているんですか？」

「いや、そんなことは知らんけど、みんなやつているからやつているんだ」
「あほなこと言うな！ 無責任なことを言うな！」

と僕は怒りますよ。冒瀆ではないか、そんなことは。だからやはり、慰霊とか追悼とかをやる。亡くなつた方に花束を置く。それは全部、知らず知らずのうちに人間は、自然の命が終わつたらすべてゼロになるなんて誰も信じていない。必ず霊は生きている。霊はどこかにいる。その霊が安らかであるようにという祈りを皆さんは捧げているわけです。非常に人間的で素晴らしいことなんです。だから、それをもつとはつきりとした根拠をもつて、本当に霊界とか、自然界の奥に見えないけど在るんだ、神さまの次元の世界が在るんだと。実は神さまの次元と我々の地上の次元は交錯し合っている。だから、我々は祈れば、キリストがパツと来てくださるわけですね。

小池先生なんかにおいては、その来てくださった方の霊の力によって、いろんな方の病



を癒したりなさってきました。それは霊と通^{つう}々の間柄なんです。隔てられてどこか向こうにあるのではなくて、行き来している。

ちょうど電波が行き来してますね。これだけでも、皆さん、不思議と思いませんか。皆さん、スマホを持っている。あちらこちらから電波が来て、チャンネルを回せば、いろんなが入ってきますね。全然見えないんですよ。見えないけれども、そういう電波は世界中を飛び回っている。しかも衝突もしないで、全部きれいに入ってくるというのはまた不思議だなと思うんですけれども。

いわば神さまの世界というのはそういうものなんです。たえず行き来している、交錯している。我々には見えないだけです。だから、我々は黙禱して、目をつむって本気で祈ればサッと来てくださる。それはもうそばまで来ているからなんです。黙禱して祈ることとは、心を開いているわけです。もうそばまで来ているから、

「どうぞ、本当に体に入ってください」

と言つて祈っているわけですよ。そういうふうに行き来している。ただそれは見えない。

人は見えないものは信じない。残念ながら。あまりにも「科学、科学、科学」と、自然科学ですべてを顕微鏡で、実験して何かするという、自分の目で確かめ、顕微鏡で確かめたものしか存在しないと、そういうふうに思い込んでしまっているから、見えないものの存在が信じられない。けれども、見えないものが実は本当なんです。たとえば愛。

「あなたを本当に愛してます」

「それなら、愛を見せてください」

と言われたらどうするんですか。プレゼントなんですか。プレゼントは愛のシンボルにすぎないでしょ。プレゼントが愛ではない。プレゼントをする心が愛なんだと言わざるをえない。ハグします。これも愛がそういう形で表れているだけで、愛そのものは見えないでしょ。命そのものは見えないですね。命が生き生きとしているから、私の手だつて生き生きとしているわけです。これが命が無くなれば冷たくなる。でも、「命そのものを見せろ」と言つても、誰も見せられない。だから、本ものは全部見えない。見えないけど、存在する。金子みすず（大正時代末期から昭和時代初期にかけて活躍した日本の童謡詩人）が言つてます、「見えぬけれどもあるんだよ」と。

プリントへ戻つていただいて、我々はそういう追憶とかそんなことではとうてい納得できない。

《伝道の書には、

「わたしは、神が人の子らに与えて、骨折らせられる仕事を見た。神のなされることは皆その時になつて美しい。神はまた、人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は、神のなされる業を初めから終りまで見極めることはできない。」（伝道3・10～11）



伝道の書には、「神は人の心に永遠を思う思いを授けられた」と書いてある。あの儂い伝道の書の中に一か所、

「神はまた、人の心に永遠を思う思いを授けられた。」

と。神がそういう「永遠を思う思いを人に与え給うた」ということは、「それは在るんだよ」ということ。

「あなたは神さまのところへ帰つてきなさい。そうしたら、神さまのほうからそれを差し出してくださるんだよ」

と。それがここにあるわけですね。

それでもなお、人は、神のなされる業を初めから終りまで見極めることはできない。」

とある。もしも、「永遠の命」(この地上の生命の終りをもって終わらない命)があるとなれば、そして、それは人間が自ら創り出すことができない以上は、神が与えて下さるほかはない。では、神は、与えて下さるのか。どうして、それを知ることができるのか。》

それは人間が自ら自分の中から作り出すことはできません。それでは、神さまが下さるしかもうないじゃないですか、あとは。自分で自分が永遠の生命をつくりだせない。「子どもをつくることはできる」と人間は言いますよ。ちゃんと子孫を残していく。それは同じ質の同じ儂い命をつくりだしているだけです。ただそれがずっと繋がっているから、いかにもずっと命が受け継がれていくと思っているかもしれないけれども、個体ということの一つ一つ見ていったら、その個体は必ず死んで終わっていく。子どもという形で次の世代は受け継いでいるだけのことで、存在していた人自身はもうそれで終りなんですよ。その人は永遠の生命を持つているわけではない。これが人間の現実です。そうすると結局は、神さまがそれを下さる以外にはない。人間は自らプロデュースできない。神さまが下さるしかない。では、「下さる」という約束はどこにあるんですかと。

●神の側からの呼びかけ

ということでは今度は、「神からの呼びかけ」というのを第三に持つてまいりました。イザヤ書55章です。

《Ⅲ 神の側からの呼びかけイザヤ書55章

「さあ、渴いている者は皆、水に來たれ。」

と。この「渴いている者」ということ。渴いていない人は来ないんです。だから、皆さんは、飢え渴いているか、永遠の生命が欲しいと渴いているか。本当のものが欲しいと本当に心がカラカラに渴いているか。渴いているなら、それを潤してくれるものを求めるわけです。でも、渴いてない人は、

「こんなのがありますよ」



「いや、自分は充分、今はもう何もかも整っているから何も要りません」
と。これがだいたい一般の人なんです。一般の人は、

「キリストのこんな素晴らしい生命をいかがですか？」
と言つても、

「いや、今は必要ありません」
と断る。

「そしたら、あなたは永遠の生命があるんですか？」

「そんなことは考えたこともありません。考える必要ありません。ははは」

と、これで終わるんです。

「でも、本当にそうなの？ あなたは80、90歳になって、もうヨボヨボになって、それでもそうやっておれるんですか？」

「いや、そんなことは今、考える必要ないです」

というのがだいたい普通の人ですね。孔子のお話もある。弟子が、

「死後の命は、死後はどんなことがあるんですか？ 死後にも命はあるんでしょうか？」

と孔子に問うた。それに対して答えは、

「人間はこの世の、今生きている自分の命のことさえわからんやつが、そんな死後のことを考えるのはナンセンスだ。今のことさえわからんのに、そんなやつが何で向こうの先のことなんていろいろ考えようとするのか。そんなのはあかん」

と断つたという。一つの断り方ではあります。でも、それはごまかしです、私から見たら。聖書はそんなごまかしはしません。実在から語りかけてきている。神さまという永遠界の方が地上の相対的な我々の儂い命の中に、「儂くないんだよ、大丈夫だよ」と、そういう生命を引つ提げて、神さまが生命の世界から預言者を通して語りかけて、それでもまだ効き目がなかったので、最後にキリストという切り札を持ってこられたわけですよ。

「これを受けとれ、これが永遠の生命だよ」

と。ヨハネ伝3章に、

「神はその独子^{ひとりご}を賜ったほどに世を愛し給うた。それは彼を信ずる者が一人も亡びないで永遠の生命を得るためだ。神が御子^{みこ}を世に遣わされたのは審^{さば}くためではない。救われるためである」

とはつきり書いてあります。それはヨハネ伝ですけれども、このイザヤ書55章のところで既に「渴いている者は来いよ」という呼びかけがきてます。

「さあ、渴いている者は皆、水に來たれ。金のない者も來たれ。あなたがたは、來て、金を出さずに、ただで葡萄酒と乳とを買い求めよ。なぜ、あなたがたは、糧^{かて}にもならぬもののために金を費やし、飽きることもできぬもののために労



するの。

この「糧にもならぬもの」とか「飽きることもできぬもの」とかいうのは、地上的なことを言っている。パンだとかその他この世の地上のものは永遠の生命とは関係ない。肉体を養うことはあつても、本当の永遠の生命とは関わりない。そんなものに大金を使つて、それで何とかごまかしているけど、そんなんじゃないよ。神さまが下さるのはもっと高次な、人間の世界では出てこないもの、神さまでしか与えられないもの、それを神さまは下さるんだ。しかも、金是要らん、ただで受けとれと。もし、金を出してきたら、それは引き換えできない、「金銭に見積もり得ざるもの」です。これは民法の言葉なんか知りませんけれども、そういうものを神さまはプレゼントしてくれる。「金銭に見積もり得ざるもの」を求めよ。そんなものは金を出したつて買えるものではない。それは神さまのプレゼントだ。有難く受けとるしかないんだと。

わたしに、よく聴き従え。そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で自分を楽しませることができる。

これは全部、霊的な賜物、霊的なプレゼント、そういうもので本当に心を、魂をうるおすことができる。

耳を傾け、わたしに来て聴け。そうすれば、あなたがたは生きることができ。

（中略）あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近く

おられるうちに呼び求めよ。

そばへ来てくださっているんだよと言っている。あなたには見えない。けれども、主のほうからは、神さまの側から近づいてきて、あなたの方の胸の扉をトントンと叩いておられるんだよ。だから、あなたの方はその音を聞く。

「あつ、主がそばにおられる。どうぞ、お入りください。おもてなします」

と。外国の観光客ばかりおもてなししないで、キリストさまをまずおもてなししないといかんではないですか。「はい、どうぞ、来てください」と言つて心の扉を開けば、直ちに中へ入ってくださる。そういう方なんです。

あなたがたは主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられ

るうちに呼び求めよ。悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを

捨て、主に帰れ。

主に帰れと。本来、あなた方は神さまと一緒に生きていたんだよ、昔は。それが神さまに対して独立宣言をして、

「神さまなんか要らん、俺たちは自分で自分の世界をつくりだす」

とやってきたわけです、人類は。神無き世界をつくりだしてきた。けれども、神無き世界はいろんなことで行き詰まった。だいいち、人間自身に永遠の生命はもう無くなった。昔、神さまと一緒に生きていたときには永遠の生命が有ったんですよ。それが神に背いて、永



遠の生命は無くなってしまった。だから、「もう一度帰っておいで。本来の姿に帰ろうよ」と。
主に帰れ。そうすれば、主は彼に憐れみを施される。われわれの神に帰れ、
主は豊かに赦しを与えられる。

わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっている。主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」（イザヤ 55・1-9）

これは素晴らしい言葉ですね。人が思うのはたかが知れている。けれども、神さまの御思いというのは、人が思い浮かびもしないことを考えてくださっている。十字架をもつて人間を救いあげるなんてことは誰も思いうかべることができなかった。それをちゃんと神さまは我々のためにご用意くださっていたというわけです。

「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっている」と主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。」

それから詩篇103篇というところは、旧約聖書の中での福音書と言われるぐらいの内容がこの詩篇103篇なんです。次のように言ってます。

「わが魂よ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なる御名をほめよ。わが魂よ、主をほめよ。そのすべての恵みを心にとめよ。」

「わが魂よ、主をほめよ」は自分の靈魂に対して言ってます。それから、「わがうちなるすべてのものよ」というのは「五臓六腑」ということ。つまり人間は心臓、肺臓、いろんなものがありますね。「五臓六腑」と昔は言ったんです、人間のそれぞれの身体の器官のことを。だから、全存在を、全身（全心）全霊でという意味です。

「全身全霊で主をほめよ、その聖なる御名をほめよ」

と。なぜなのかというと、

主は、あなたのすべての不義を赦し、

背きの罪、その他もろもろの神さまに対する反逆、それを全部赦してくださった。

あなたのすべての病を癒し、

病気さえもう癒されている。

あなたの命を墓から贖い出し、慈しみと憐れみとを、あなたに被らせ、あなたの生きながらえる限り、良き物をもつて、

地上的な良き物だけでなく、本当の霊の生命、霊の食物をもつてあなたを十分に満たしてくださる。

あなたを飽き足らせられる。こうして、あなたは若返って、鷺のように新た



になる。（中略）

皆さん、「驚のように新たに」なってますか、日々に。歳をとっていきますよ、日々にね。でも、それと逆比例的に日々に新たになっていく。それを自分で言わないと。

「私は日々に新たになっていますよ。私を見てください」

と、そう思って、皆さん、言わないと。そう言いますと、神さまのほうで、

「そうだ、あいつに恥をかかせてはいかん」

と（笑）。そうなんです。皆さん、大胆にキリストを告白し、キリストの御言を宣言すると、神さまのほうでやはり担保責任という——これは法律用語ですが——

「あそこまで私を信じて、人々に向かって宣言している。それはやはりプッシュしてバックアップしないと、恥かせてはいかん」

と言って、神さまのほうで一生懸命にプッシュしてください。それでこっちは力を受けるから、また余計やる。またそれに応じて神さまはプッシュする。これの相乗効果です。

まあ小池先生なんているのはそういうものだと思いますね。私は1973年に——小池先生がちょうどその直前くらいに「東京キリスト召団」という看板を出された。それまでは「武蔵野幕屋」と言っていた。それを「東京キリスト召団」と称した——

「先生、そっちが東京キリスト召団なら、私は京都キリスト召団と名乗ってよろしいですか？」

「ああ、大いにやりたまえ」

と。それで「京都キリスト召団」という名前を、まあいわば許可をもらって、そして遡及効果があって1972年から私は始めていましたから、1972年から「京都キリスト召団」が始まった。そういう、非常に先生は燃えに燃えていた。

それで、驚のように日々に若返る。朝が来ることに「はい、主さま、ありがとう。若返りました。白髪が一本ぬけましたけれども、若返りました」と、神さまに対して朝ごとに感謝して、朝を迎える。

主は、憐れみに富み、恵み深く、怒ること遅く、慈しみ豊かでいらせられる。

主は、常に責めることをせず、また、とこしえに怒りを抱かれない。主は、われらの罪にしたがって我らをあしらわれず、われらの不義にしたがって報いられない。

旧約聖書の中にこんな言葉があるというのは、私には救いです。でないと、旧約聖書は恐いんですよ。ちよつとでも背くようなことをしたら、直ちに死刑ですからね。そういうのが多いんですよ、書いてあるのは。そして、「徹底的に滅ぼし尽くせ」とか、酷いことがいっぱい出てきます。その時代というもののなのでしょうね。そういう世界の中でこういう言葉があるというのは、本当に私には救いであり、有り難いことだと思っています。

天が地よりも高いように、主が己を畏れる者に賜わる慈しみは大きい。東



が西から遠いように、主は我らの咎を我らから遠ざけられる。父がその子を憐れむように、主は己を畏れる者を憐れまれる。

主は、われらの造られた様を知り、我らの塵であることを覚えていられるからである。人は、その齢は草のごとく、その栄は野の花にひとしい。風がその上を過ぎると、失せて跡なく、その場所に聞いても、もはやそれを知らない。

やっぱり向こうの風は熱風なんでしょう。熱風が吹き去りますと、しおらしい花は全部枯れてしまうという気候なんでしょうね。しかし、自然界はたとえそうであっても、

しかし、主の慈しみは、とこしえからとこしえまで、主を畏れる者の上にあり、

「おそれる」という字は、昔は「恐れる」という字が当ててある。私はここでちゃんと「畏れかしこむ」という畏敬の「畏」という字をもつてきています。

その義は、子らの子に及び、

あなた方が本当にキリストの僕、婢女として、本当にキリストの生命を生き抜けば、その余韻というのは子どもや孫にまで及んでいるという。よく「功德を積む」とか言います。本当に或る人が素晴らしいと、その人の徳というものが子、孫ぐらいまでは多分行くんです。そこから先まで行くかどうか、それは知りませんが、そのぐらい行くんです。だから、皆さんの存在そのものは物凄く大事なわけです。子孫という方々の上にも大事なわけです。

その契約を守り、その命令を心にとめて行う者にまで及ぶ。(詩篇103・1～18)

これが旧約の世界ですね。旧約の世界は、無常観が漂っている伝道の書があるかと思うと、イザヤ書55章、詩篇103篇、そこでもう既に福音がこのようにして顕れてきている。

●新約の世界——キリストの福音

そして、それがはつきりと形をとって、具体的に露な形で顕れているのが新約聖書だということ、次に「新約の世界、キリストの福音」と題しております。

Ⅳ 新約の世界——キリストの福音

旧約における人間の側の嘆き、悲しみ、儂さ、罪とがの責め、苦しみ、呻き、その中での「永遠の生命」「永遠なるもの」への願い、これらの全てを一身に背負って現れたのが、ナザレのイエスという人だった。この人は、自らを「神から遣わされた者」と自覚していた。

これはヨハネ伝です。神さまのことを「父」と呼び、そして自分はその父なる神さまから遣わされてこの世に存在している。自分は勝手に来たのではない。遣わされてやって来たと。神さまのことを、「私をお遣わしになった方」と、そういう呼び名で呼んでおられます。こ



れはヨハネ伝独特です。

神に、「父よ」と呼びかけ、絶えず父なる神の懷の中に祈り入っていた。天地万物の創造される前から、天界において神と共にあったとの自覚をもっていた。

そして、この方にとって最も大切なことは、

自分の思いを実現することではない。自分の思いなんてお持ちでないんですね。

父なる神の御思いに応えること、父の御心（御意）に従つことであつた。

これがこの方のいわば生きざま、存在理由というかな、

「私が世に來たのは自分の勝手な思いを遂げるためではない。私をお遣わしくださつた方の御意を実現するのが私の使命だ」

と仰つた。それでは、御意とは何かというと、それがここにある。

次のように言つておられる。

「わたしが天から下つて來たのは、自分の心のままを行うためではなく、わたしを遣わされた方の御心（御意）を行うためである。わたしを遣わされた方の御心（御意）は、わたしに与えて下さった者を、わたしが一人も失わずに、終りの日に延らせることである。わたしの父の御心（御意）は、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである。そして、わたしはその人々を終りの日に甦らせるであらう。」（ヨハネ6・38〜40）

「終りの日」というのは、皆さん、これをどう受けとつていますか。聖書学者に聞いたら、

「最後の新天地の到来の時だ。それまでは眠り続ける。ラッパが鳴り響くと、パツと目が醒めて、空中に掲げられる。そこで主とお会いする」

という答えをするでしょうね。では、それはいつなんですか？ わからん。何年後ですか？ わからん。何千年後ですか？ わからん。神のみ知り給うと。

「そんなことで、あなたは気楽なことを言つてられますね。私はがまんができない。

私にとつての終りとは、私がこの世を去る時、私の地上の命の終わる時、その時に直ちに甦りの生命をくださる。ズレなく下さる。それがキリストの約束だ」

と。私はそう信じてます。私がこの世を去れば、直ちにキリストに迎えられる。キリストはもう待ち受けてくださっている。そして、まず何と仰るかな。キリストは、

「お前の奥さんを先に取つてしまつて悪かつたけど、お前はその間、今までようがなばつた。今、しっかりハグしに行つてこい」

と。キリストがまずハグしてくださる。それから、奥さんのところへ行つてこいと。そんなのを私は思い描いているんですよ。皆さんはどうですか？ そんな眠り続けて、ラッパの鳴り響くまで待つていますか？ 墓の中で。そんなのは嫌ですよ。「墓にはおりません」という歌があるじゃないか（笑）。そうでしょ、墓の中で眠り続けて、いつかわからん時にラッパが鳴つて起き上がるなんて、そんなことは私はとんでもない。この世を去つて直ち



にパツと変身です。キリストが変身された同じ姿に我々も変えられるんです。キリストはそれ以下のことを我々になさらない。キリストが永遠の生命なら、その同じ質の生命を我々にくださる。それがキリストの御思い、それが父の御意なんですね。それでここにちゃんと、

「父の御意は終りの時によみがえ甦らせる」

と。それは息を吹き返すのではない。別の、あのキリストの復活の栄光の姿に我々も変えられていく。すごいではありませんか。そういう自分の将来のビジョンを持って生き生きしなかったら、おかしいですよ。

だからさつき、老人ホームとか、施設のほうへ行つて、そういう話をしないといけない。

「キリストというお方の約束は凄いですよ。キリスト教なんていうのと同じがう。生命そのものなんです。この方は死んだって死なない。故あって十字架にかかれた。故あってというのは、みなは神さまに背いた。背いたやつは普通みんな地獄へ行く。人殺しは死刑になるのが当たり前でしょ、今の刑法だって。罪に対しては罰が臨むでしょ。罰が本当に臨んだら、我々はみな地獄行きだった。それをこのお方は——あのような孝行息子はいない——もうすべて父の御意を、「あなたの御意を成させてください」と完全に父なる神さまに自分を明け渡して、それで御意ならばそのことをすべてやってこられた。この方は、もしこの世を去るとしたら、パーッと変貌して、素晴らしい輝く栄光の姿でサーッと向こうへ行つてしまう、「さよなら」と。そうしたらあとは、我々には救いはないわけです。我々を本当に栄光の姿に変えたい。そのためには罪という、背きというものに対して——必ず処罰を受けなければいけない——それを代りに私が受ける」

と。受ける必要のない方が受ける。神さまに対して、

「これでいいんですよ。あなたがこの罪びとに対して下そうとしている審判を私が身代わりに受けます。なぜか。私は彼らを愛しているからです。だから、彼等のために私は自分の命を献げます。神さま、それでいいんですよ？」

「それでいいんだよ。いや、それはお前しかしてくれる者はいない。だから、頼むからそれをやってくれ」

と。私は、キリストのゲッセマネの祈りはそうだったと思う。

「これ以外にないんですか。あなたは全知全能の神さまで。私が十字架にかからなくても、あなたの奥の手があるのではないですか。私はあなたといつも一緒にいて幸せだったのに、なんで私はあなたから引き裂かれて、闇の世界へ突き飛ばされて、そんなことをなぜしなければならないのですか。私は何一つあなたに背いたことはなかったではないですか。なのに、「地獄へお前は行け」なんて、なんばあなたのご命令といえども、これは無茶ではないですか。あなたは他に智慧はないのですか。全知全能でしょ」



「仕方がない。孝行息子よ、頼む。わしが直接十字架というのは、霊なる神さまは無理なんや。肉体を持つ人間と同じ姿をもっているお前だからこそ、やつてくれるんや。だから、頼むからやつてくれ」

「わかりました」

と。それがあのゲッセマネの祈りだったと私は思っている。神さまのできないことをキリストがなさる。「頼むから、それをやつてくれ」と。実は神さまは人間を審きたくないんですよ。人間を滅ぼしたくない。けれども、「義」というものがありますから。義は貫かれなければならぬ。「愛」は救いあげたい。愛はみんなを救いあげたい。けれども、義というものがあるから。それをキリストがお受けくださる。

「では、私は彼等の罪を全部背負い切ります」

と。そして、十字架の上で、十字架につける者たちを、

「彼らを赦してやつてください。彼らは訳のわからないことをやつてますけれども、どうぞ、赦してやつてください。私はいよいよ十字架にかかるのではありません。」

自分で進んで十字架にかかるのです」

これは、ヨハネ伝でちゃんと約束しておられます、10章で。そして、

「わがこと終りぬ。わが霊を御手に委ねます」

と。聖所の幕が真つ二つに裂けたと書かれています。見守っていた百卒長は非常に心を打たれて、「この人は素晴らしい人だった」と言った。そういう場面が出てきてます。これは本当にこのイエスという方は何とも言えない素晴らしいひとかということ。地上に居られたイエスも素晴らしいかった。けれども、あのゲッセマネ、そしてゴルゴタの丘を重い十字架を担いで登られて、そして十字架に懸けられるという、あの一連の場面。これは涙なくしては読めません。「ゴルゴタの丘の」（召団讃歌A24）という小池先生の作られた讃美歌は素晴らしい。あの通りです。

〔註 A24 「ゴルゴタの丘の」——ペンテコステの歌——（讃美歌239「さまよう人々」）1
ゴルゴタの丘の十字架の上／天涯孤独の主の御姿／あがないの血潮、地に滴り／十字架に極まる主の義と愛。2主はよみがかりて幕を破り／マグダラのマリヤ女たちと／弟子にここかしこ四十日／現われ給いて約束せり。3「汝れらは日ならず聖霊にて／バプテスマされ祈り待てよ／聖霊臨まば霊力を受く／世界の極まで証者となれよ」。4ペンテコステの日相集いて／使徒ら女たち切に祈る／天よりにわかに臨みたるは／み霊の疾風よみ霊の火よ！。5祈れる者みなうちに燃えて／み霊に満たされ異言の波／別人のごとく今やなりて／主のエクレシヤはここに成れり。6現今のエクレシヤ危機を孕む／使徒らの次現に立ち帰らん！／われらもいよいよ祈り入りて／み霊の証しを果たし往かん〕

そうやってキリストは陰府に下ってくださいろうとした。陰府で死んだやつをまた救いあげてのぼって来られたのだからね、キリストというのはただで起き上がらないですね。キリストは地獄へ行つて、地獄で苦しんでいる霊たちを引き連れて天にのぼられた。ペテロ



書に出てきています。この「**霊**」というのは「昔のあの方舟はこぶねの時に従わなかった者たちだよ」と書いてますけれども、なにもノアの時の連中ばかりではない。その他にもいろんなことで苦しんで地獄、暗闇に居る霊たちで、キリストにすがる者は全部救いあげる。すがらない者はしょうがない。これは神さまはそれぞれの人間の自由を重んじておられますから。

「光がほしい者は光にきなさい。光が嫌な者は暗闇でいいですよ」

と、自分で自分の行く場所を決める。キリストは地獄まで行って、暗闇の中でそこがパッと明るくなったんでしょね、光を慕う者はキリストと一緒にのぼってこられた。そして、忽然として顕れてきたのが復活という事態です。これはもう霊体ですから、触るにも触れない。しかし、「身体もあるよ」と言って、お魚を食べられたというようなことも出てきますでしょ。そういう素晴らしい栄光の姿で顕れられた。

あれに出くわしたかったなあ、私は。要するに栄光の姿で顕れて来られたんですよ。しかもそれは、「あなた方も同じ姿に化すんだよ」と。「キリストと同じ姿に化する」とコロサイ書3章に出てきます。

「**あなた方は既に死んだものであって、あなた方の生命はキリストの中に隠されてある。**」

と。コロサイ書3章の始めのところ、3節。

「**あなたがたはすでに死んだものであって、**

地上で生きていても、地上で確かに肉体は生きているけれども、本質的には十字架でもう古いあなたは死んでいるんだと。新しくされている。新しいあなたで、

あなたがたのいのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである。⁴ **わたしたちのいのちなるキリストが現れる時には、あなたがたも、キ**

リストと共に栄光のうちに現れるであろう。」(コロサイ3:3-4)

あなた方も栄光の姿を賜って、そして顕れてくる。自分がこの世を去る時にキリストの栄光の姿に化せられて、キリストとハグしていただける。そういうイメージを私はいだいています。皆さんもそういうイメージを持つてくださいね。

地上ではどんなに苦しいことや、いろんなことがあっても、それは全部、地上の命をしつかり命して生き抜いて、そして勝利して、この地上での仕事が終わったたら、向こうへ迎えらる。あのキリストの栄光の姿に我々も同じ姿に化して変えられる。そして、キリストにお会いして、また親しいひとに会う。

親しいひとで向こうへ行つたのはみんな天使になって働いていますからね。向こうで休んでません、絶対に。それは地上にいるいろんな人たちを救おうと思って、一生懸命に働いてくれているはずなんです。私も向こうへ行つたらまた働くし、きつと小池先生なんか物凄く働いておられると思いますよ。向こうは忙しいんですよ。

「**走れども疲れず、歩めども倦うまざるべし**」



と。地上でそうだったら、向こうへ行ったら、もっともっと働いてもう元気いっぱい、というのが向こうの世界です。しかも、それは行き来している。どこか遠い所にあるのではない。もうここに行き来している。さつき電波が行き来していると言いました。見えなだけで、もう絶えず行き来しているわけです。だから、チャンネルを合わせたらい、心のチャンネルをキリストの波長に。我々は小池先生の波長ですね。そういう愛する方々の波長にちゃんと合わせば、サツと交流できている。そういう世界なんですね。

法律学者がこんなことを言うんですよ。私は法律学者ですけども、

「本当はキリストの僕、キリストによつて新しく創られた者。国籍は天にあり」

と、それを堂々とどこでも告白します。

「では、二重国籍ですか？」

「はい、二重国籍です。地上では日本国民、日本という国籍があるけれども、本当の国籍は天にある。天国人です」

と。皆さん、そうでしょ。

「わが国籍は天にあり」

という。だから、みな二重国籍なんですよ。こんな地上でなんていうのは、

「はい、私は派遣社員でございます。ご命令によつて地上に遣わされました」

と。本当なら、一遍死んで向こうへ往つて、それからまた来るんですけども、それを簡略していただいた。一遍向こうへ召されてからもう一遍戻つて来て、というのが本来なんだけれども、もう面倒くさいから、今このままでパツと変わる。変身する。見かけは古いままで、しかし、中身は完全に変わっている。パツと変身している。それが、

「人もしキリストに在らば、新しく造られた者なり、古きは既に過ぎ去り、視

よ一切は新しくなりたり」(コリント後5・17)

と、コリント後書に出てます。全部、聖書にちゃんとあるんですよ、私の言っていることです。ですから、聖書は荒唐無稽なことを言っているのでも何でもありません。当たり前のことを言ってくれている。天において当たり前のことが、地上の人から見たら不思議なことになる。

「わが思いはあなた方とは異なる。天と地が離れているように、東と西が離れているように、それだけ違うんだ。」

神さまの次元というのはそんなに違うんだと。でも、それを「然り」と受けとった者は、そのままサツといただく。そういうことになつて参ります。

●どうすれば永遠の世界に入れるのか

またプリントに戻ります。

《私たちは生まれながらの人間(それを聖書では、「肉」と表現している。)のままでは、「永遠の命」を持つていないし、天の次元(永遠の世界)とは無縁である。それは、神ご自



身から賜わるほかはない。どうすれば、永遠の世界に入れるのか。ユダヤ人の指導者ニコデモとの対話の中で、イエスは次のように言っておられる。

「よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国に入ることはいできない。肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。」

我々は肉から生まれる。だから、我々はこのままだったら、肉なる存在で終わる。しかし、肉なる存在が霊をいただいて、霊によって新しく生んでくださる。これは変身ですね。変身しました。霊から生まれる者は霊である。

あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うに及ばない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこから来て、どこへ行くかは知らない。

今ならわかっています。フィリッピンの向こうで台風が発生しました。それはこういう経路を通ってやがてやって来ますと、ちゃんと今はわかりますよ。昔はわかりません。どこで風が生まれてどこへ行くのだろうか、わからない。「新しく生まれる」というのも、「生まれた」という現実はある。それを見ていると確かに違う。でも、いつ、どんなふうに生まれたか、これは誰もわからない。そういうもんだよと、言っているわけです。

霊から生れる者もみな、それと同じである。」（ヨハネ3：3～8）

このように語ったあと、

「天から下ってきた者、すなわち、人の子のほかには、だれも天に上った者はない。そして、ちょうどモーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた、上げられなければならない。」

これは「民数記」という所に出ています。罪を犯した人が次々と死んだり、病気で仆れていった時に青銅の蛇を見上げた者はみな癒され救われたという、お話があります。蛇は呪いなんです。呪いの蛇を仰ぎ見た者はみな癒されていった。キリストが十字架に懸けられて天に上げられたということは、呪われる者となつて現れた。これはガラテヤ書にちゃんと出てきます。キリストはそのことを言っておられる。

それは、彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである。」

と語っておられる。即ち、ご自分が人々の罪過（罪、咎）を背負つて十字架に架かることを暗示しておられる。

また、羊と牧者との関係に見立てて語られているところ（10章）では、

「わたしが来たのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。わたしは善い羊飼である。よい羊飼いは、羊のために命を捨てる。（中略）父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである。命を捨てるのは、それを再び得るためである。だれかが、わたしからそれを取り去るの



ではない。わたしが、自分からそれを捨てるのである。わたしには、それを捨てる力があり、また、それを受ける力もある。これは、わたしの父から授かった定めである。」

と語っておられる。

つまり、キリストの定め、天命。十字架は、人に無理やりに十字架に付けられて、「いや苦しい苦しい、でもしょうがない」と言つて、人に無理やりに十字架に付けられるのではない。自分が自ら進んで十字架につく。人のせいではない。それをはつきりとここで言っておられます。しかも、

「それは自分の運命だ、天命だ。天命に対して自分は従順に従う」と言っておられる。

先のヨハネ福音書3章では、イエスの言葉の後、次のように書かれてある。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは、御子を信じる者が、ひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によつてこの世が救われるためである。彼を信じる者は、裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。」

「裁き」とは何か。光が来ているのに、「光は要らない。私は闇が好きだ」と言つて自ら闇を選んでいく。これはどうしようもない。神さまは無理強いはなさらない。

「光と闇、あなたはどっちが好き?」

「はい、光が好きです」

「それなら、こつちへおいで」

「あなたはどっちが好き?」

「闇が好きです」

「では、闇へ行きなさい」

と。自ら自分の行く所を選んで行っているんです、人間はみんな。悪事を企んでそれが積み重なっている人は、光は眩まばゆくてやばいんですよ。自分の悪事が全部あばかれていたまれないから。それよりは闇のほうでひっそりしているほうがいいというので、みんな闇を選んでいく。そういう世界なんです。

ですから、神さまは絶対に裁きはなさらない。自分で自分の行く場所を決めているんです。お友だちを見たつてそうですよ。だいたい似た者同志が友だちになる。自分に合わないグループの中に入ったら、居心地がわるいでしょ。そういうもんなんです。友は類をもつて集まるという。それと同じように、人間は自分の行きたい所を選んで行くんです。

我々は光に憧れている。ただ自分で行けなかった。ところが、神さまのほうで光の道を示してくだり、「あつ、有り難うございました」と言つて通つて行く。そういうもんですから。



その裁きというのは、光がこの世に来たのに、人々はその行いが悪いために、光よりも闇の方を愛したことである。悪を行っている者はみな、光を憎む。そして、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光に来ようとはしない。しかし、真理を行っている者は光に来る。その人の行いの、神にあつてなされたということが、明らかにされるためである」（ヨハネ3・16～21）。

さらに続けて、

「上から来る者は、すべてのものの上にある。地から出る者は、地に属する者であつて、地の事を語る。天から来る者は、すべてのものの上にある。彼は、その見たところ、聞いたところを証しているが、だれもその証しを受け入れない。しかし、その証しを受け入れる者は、神がまことであることを、たしかに認めたのである。神がお遣わしになった方は、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。

これはキリストの言葉です。

父は御子を愛して、万物をその手にお与えになった。御子を信じる者は、永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命に与ることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである。」（ヨハネ3・31～36）

こういうふうにして、人は自らを裁きに至らしめるといふことが言われています。

イエスの受難については、旧約聖書のイザヤ書の預言に明示されている。第53章がそれである。

「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また、顔を覆つて忌み嫌われる者のように、彼は侮られた。われわれも、彼を尊ばなかった。まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみを担った。然るに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。

彼は自分のせいで、自分の罪のために、神にたたかれ打たれ、苦しめられている。俺たちには関係ないと思つていた。いや、そうではなかった。

しかし、彼は、われわれの咎^{とが}のために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼は自ら懲らしめを受けて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によつて、われわれは癒されたのだ。

全く思いもよらないことをこのお方はなさつてくださった。

われわれは皆、羊のように迷つて、各々、自分の道に向かつて行つた。主（神）は、われわれすべての者の不義を彼の上に置かれた。彼は、しえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかつた。屠り場に引かれて行く子羊のように、また、毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかつた。彼は暴虐な裁きによつて取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったで



あろうか、彼は我が民の咎のために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。」(イザヤ53・3〜8)

こんなことを自らやる人がいるだろうか。誰もいない。ユダヤの人たちは未だにキリストを受けとっていない。次がまともになります。

十字架に架かって人の(全人類の)過去・現在・未来のすべての罪(神に対する叛逆の罪)を負われ、人間を根底から救いあげた義人(神の御心に従い切った方)が、死のままで朽ち果てるなどということはあり得ない。その人は、忽然と、まばゆい霊体で現れた。これが、「復活」と言われている事態である。弟子たちは、このキリストに出会い、さらに五旬節の日に聖霊の降臨に浴して、別人とされて(新たに生れて)、この復活されたキリストを伝えることに命を惜しまなかった。

使徒行伝を見ましたら、彼らの宣教はみな、「キリストは甦られた」という、復活のキリストを語っている。キリストご自身が弟子たちと一緒にたてゝ働かれましたから、いろいろな奇蹟が起こつてきましたけれども、その奇蹟そのものを弟子たちは伝えていない。

「キリストは甦られた。あなた方が十字架に付けて殺したあの方が実は本当の救い主だった。あなたは悔い改めなさい。心を入れ換えなさい」ということを弟子たちはずっと語つて行きました。

使徒言行録(使徒行伝)は、その記録である。

最後の晩餐と言われている席において、イエスは弟子たちに約束された。

「わたしは、あなたがたを捨てて孤児とはしない。あなたがたの所に歸つて来る。もうしばらくしたら、世は、最早、わたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがたは、わたしを見る。わたしが生きるのです、あなたがたも生きるからである。その日には、わたしは、わたしの父に居り、あなたがたは、わたしに居り、また、わたしが、あなたがたに居ることが、わかるであろう。わたしの戒めを心に抱いてこれを守る者は、わたしを愛する者である。

「わたしを愛する」とはどういうことかというと、感情的に愛するのではない。好きだ嫌いだではない。言葉を守る。キリストの心を心とする。そういう生きざまをする。「これが私を愛するということだよ」ということを仰るわけです。そのように私を愛してくれる者、即ち言葉を守ってくれる者は、父なる神さまからも愛される。私もその人を愛する。

わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、

その人に私自身を顕すであろう。」(ヨハネ14・18〜21)

そういう約束をくださった。

それから次に書いてますのは、キリストはいつたいどういう人を相手にしてくださるか。自称義人ではない。「自分は義しい、自分は救いなんか要らない」と言つて胸を張っている人は、キリストはご用はないんです。



「自分はもうあなたに救っていただかなければどうしようもありません」

と。病に苦しんでいる人、罪に苦しんでいる人なんかはそうでしたね。それから、当時だったら「律法を知らない」ということも罪だった。聖書で「罪びと、罪びと」と書かれているのは「犯罪者」という意味ではなくて、「律法を知らないのは罪」なんです。そういうふうにして、いわゆるパリサイの義人からは裁かれていた人たちがキリストの所へやって来る。そういう人たちをキリストは救い上げようとなさった。そういうことなんです。

神・キリストが相手にして下さるのは、いわゆる「義人」(自分は正しい、神にすがったり、救いを求めたりする必要は存しない、と自認している人)ではなく、「病人」(心に傷を持っていて人、神の憐れみ、救い、護りがなければ生きていけない、と自覚している人)である。

「健やかな人には医者には要らない。要るのは病人である。『わたしが好むのは憐れみであつて、犠牲^{いけにえ}ではない』とはどういう意味か学んで来なさい。わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人^{つみびと}を招くためである。」(マタイ9・12〜13)

●新しい戒め

それでは、キリストは何を我々に求めておられるか。私たちはキリストによって新しい生命をいただきました。「ああ、うれしい、うれしい」だけで終わったらいかんというわけです。我々には使命がある。まず何を一番求められたか。

V 新しい戒め

弟子たちとの別れに当たって主イエスが弟子たちに与えた唯一の戒めは、「互に愛し

合いなさい」であつた。

これなんですよ。「でつかい仕事をしろ」とは全然仰らない。「あなた方は互いに愛し合いなさい」と。あなた方が本当に愛し合っている姿、これは見える。愛は心の中のものですから、それは見えない。けれども、人が愛し合っている姿は見える。愛の反対は憎しみです。憎しみも心の中にあるときは見えない。でも、いろいろいけずをしたり、いじめたりというのを見えます。だから、人は見える行動において、その見えない内心を推論することになる。それでキリストは、

「あなた方は愛し合いなさい。あなた方が愛し合っているという姿が人々の目に映つたら、「あ、やっぱりキリストの弟子やな。キリストの弟子はちがうわ」ということになるよ」

と。ところが、分裂ばかりやったらどうですか。喧嘩ばかりやつてたらどうですか。要するに、人は中身はわからない。外に表れたものでしか判断できない。だからそこで、実に美しい姿が表れていると、「ああ、素晴らしい」と言う鵜。



内村鑑三がアメリカに行つて、感動したのがそれだった。日本の世界は、男が威張っている。妻の二人や三人持つのは当たり前だった。内村鑑三も親父からそう言われた、

「お前はな、立派になつて、妻の二人や三人持てるぐらになれよ」

と言われた。アメリカへ行つたら清らかなんですね。実に家庭というのが素晴らしい。夫婦が愛し合っている姿、家庭が素晴らしかった。それで凄く感動したと言う。アメリカの初代のクリスチャンたちはみな新天地で新しいことを始めた人たちですから、素晴らしかったでしょう、実際。だから、やはり内村鑑三は何に感動したかというところ、その家庭の姿に感動して、日本に帰ってきたということです。

ヨハネ福音書の13章31～35節、

「さて、彼（イスカリオテのユダ）が出て行くと、イエスは言われた、「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によつて栄光をお受けになった。彼によつて栄光をお受けになったのなら、神ご自身も彼に栄光をお授けになるであろう。すぐにもお授けになるであろう。子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言つたとおり、今あなたがたにも言う、『あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない』。わたしは、新しい戒めをあなたがたに与える。互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、

その愛はいい加減な愛ではない。命賭けの愛なんです。キリストが弟子たちを愛された愛はすごい。そのような愛をもつて互いに愛し合いなさいと。

あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによつて、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」。

神は見えない。信仰も外部からは見えない。愛も、それ自体は見えない。しかし、人々が互に愛し合っている姿は見える。いがみ合い、憎み合っている姿も見えるように。そして、親しい間柄の人間関係において、一緒に暮らして行く人たち、一緒に仕事をして行く人たちにおいて、長期間、互に愛し合うことは簡単なことではない。

一時的な行きずりの人とは、対応できる。それは非常に美しい関係ができるかもしれない。でも、人の家庭、結婚生活、あるいは職場、長期に同じ人たちと一緒にいて過ごすということは、それ自体、だんだんいろんなボロが出てきますよ。あらも見えてきます。それでいながら、美しい愛の関係を保つというのは、本当に難しいことです。これは実は自分自身によつてはできないことです。人間の肉なる自分では、肉なる人たちは、これは耐えられないんですよ。だから、新しく生まれて本当にキリストの姿に我々がならなければ、キリストのような姿にならなければ、これは実現できません。ピリピ書の2章に、

「キリストの心を心とせよ」

とあります。パウロは、



「⁵汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。⁶即ち彼は神の貌^{かたち}にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わず、⁷反つて己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。⁸既に人の状^{さま}にて現れ、己を卑^{ひく}うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順^{したが}い給えり。」（ピリピ2・5～8）

とあります。そういうふうにして自分を棄ててかかっている。そういう姿、棄身の愛、この姿に徹しないと、互いに愛し合うということは無理だよと。だから、人間の家庭の中で、職場において、その他いろいろな所で人間がいがみ合ってしまうのは、みんな新たに生まれていないからなんです。肉なる者はできないんです。だから、本当に新たに生まれて、キリストの霊をいただいて、キリストの心を心としたならば、それはひとりでにできるようになる。それぬきにして道德の教えとして、「互いに愛し合え」とか、「こうせよ、ああせよ」とか言ったら、それは偽善が生まれてくる。上辺だけはやっているけれども、実は心の中は怒り心頭、そういうことになるんですよ。だから、すべて内側から革命を起こしていかなければならない。そのことをここに書きました。

主イエスは弟子たちに、遺言として、

「互に愛し合うように。わたしがあなたがたを愛したように、その愛で、互に愛し合うように」

と言われた。何か立派な大きなことをせよとは言われなかった。

けれども、そんな「愛」を人は持っているのだろうか。主イエスは弟子たちに、また次のように言われた。

「わたしの戒めは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。人がその友のために自分の命を捨てることもこれより大きな愛はない。あなたがたにわたしが命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。わたしはもう、あなたがたを僕^{しもべ}とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実を結び、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである。これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである」（ヨハネ15・13～17）。

それから、ヨハネの第一の手紙。ここももつと具体的に書いてます。「愛だ、愛だ」と言っても、本当に自分の近くに貧乏な人、苦しんでいる人がいるのに、知らん顔している。そんなものは愛ではない。

「行いと真実をもつて愛し合おうではないか」



ということを言っています。

ヨハネはその手紙の中で次のように呼びかけている（第一の手紙）。

「主は、わたしたちのために命を捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のために命を捨てるべきである。世の富を持っていながら、兄弟が困っているのを見て、憐れみの心を閉じる者には、どうして神の愛が、彼のうちにあるうか。子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか。」（ヨハネ一3・16～18）

「愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものである。すべて愛する者は、神から生れた者であって、神を知っている。愛さない者は、神を知らない。神は愛である。神はそのひとり子を世に遣わし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによってわたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をお遣わしになった。ここに愛がある。愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。神を見た者は、まだひとりもない。もしわたしたちが互に愛し合うならば、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである。」

神が御霊をわたしたちに賜わったことによって、わたしたちが神におり、神がわたしたちにいますことを知る。わたしたちは、父が御子を世の救い主としてお遣わしになったのを見て、その証しをするのである。もし人が、イエスを神の子と告白すれば、神はその人のうちにいまし、その人は神の内にいるのである。わたしたちは、神がわたしたちに対して持つておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます。わたしたちもこの世にあって彼のように生きているので、裁きの日に確信を持つて立つことができる。そのことによって、愛がわたしたちに全うされているのである。」（ヨハネ一4・7～17）

ヨハネの手紙ではさんざん愛のことを言っています。それから、福音書におきましては、旧約において大事な戒めは何かというと、

他の福音書においても、最も大切な戒めとして、「神への愛」と「人への愛」が謳われている。マルコによる福音書12章28～31節、律法学者の「すべての戒めの中でどれが第一か」との質問に対するイエスの答え、

「第一の戒めはこれである。『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、



ただひとりの主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なるあなたの神を愛せよ。第二はこれである。『自分を愛するよう
うにあなたの隣り人を愛せよ。これより大事な戒めは、ほかにない』。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、主なるあなたの神を愛せよ」

と、これが一つですね。それから、

「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」

ということ。この「尽くし、尽くし、尽くし」というのは、全部出し尽くして空っぽになるということです。自分の内なるものを全部献げ尽くして、もう自分は空っぽになって、そのくらいに神さまのことを第一として生きろと言う。これが第一の戒めです。そんなものはできませんよ、人間は。それから今度は、「己の如く隣人を愛せよ」と、これが第二。これも人間はできません。あの二つの戒めは、そのままでは肉なる人間は絶対にできないんです。それをできるかの如くに錯覚したのがみな間違いのもと。福音書に出てくるパリサイ人なんかは全部、自分はできると錯覚していたのが間違い。そういうことです。そして、現実はどういうことが愛なのかということが、善きサマリヤ人の譬え話^{たと}がありましたね。それをここに引用しましたが、これは省略しておきます。

それから、結婚式で引用されるのは、コリント前書13章の「愛の讃歌」です。

「愛」の大切さは、結婚式でよく引用される使徒パウロのコリント前書13章の「愛の讃歌」が有名である。

「たといわたしが、人々の言葉や御使いたちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鏡^{にようはち}と同一である。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分の体を焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、一切は無益である。愛は寛容であり、愛は情け深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みを抱かない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつまでも絶えることがない」(コ

リント前13・1〜8)

この最後の4行ですね。これを皆さん、書き抜いて、壁に貼り付けてください。ご夫婦なら、これを貼りつけてね、何かあると奥さんが旦那さんに、

「あなた、ここに『いらだたない』と書いてあるでしょ。あなたはいらだっているからだめよ。今日は減点1ね」



とか。奥さんだつていろいろあるでしょ。

「怒らない、怒らない。『愛は寛容である』と書いてある」

とか。そういうふうにしてこれを実践してくださいね。そしたら、円満まちがいなし。

●神の「愛」と人の「愛」のちがい

それから最後に書きましたのは、神の愛と人の愛のちがいということ。人も「愛」という言葉が好きなんです。「愛子ちゃん」という名前がいっぱいありますね。「愛」というお名前が付いている方もいらつしやる。でも、人の愛というのは、これは新しく生まれて、神さまから本当の愛をいただかないと、本当の愛の人には変貌できない。というのは、人の愛というのは、やっぱり愛することによって自分を愛しているという面がある。人を愛する、その愛していることによって、その相手が応じてくれますね。それによって自分はうれしいわけです。それを求めるんです。逆に、返ってこなければ、「なんだ、これだけ愛しているのに、このやろー」なんて、逆に愛が憎しみに変わったたりするわけです。つまり、「愛している」と言いながら、そのことによって自分を愛しているわけです。

自分の利益のために人を愛している。自分の利益とは関わりなく、ただ無条件に人を愛する。これは神さましかできない。そういう愛の人になろうと思ったら、やはり内側から変えてもらわないと、変身させてもらわないと、愛は成り立たない。そこにみな気がつかない。だから、困るんです。気がついて、

「愛は私にはありません。だから、神さま、主さま、あなたが私の愛となつて宿ってください。その愛で相手を愛するように」

と。子どもさんを、奥さんを、その他職場の人を愛することができるよう、どうぞ、してくださいという祈りを持つていけば、「ああ、わかったよ」とやってくださるけれども。「いや、私は愛の人になろう。愛になりました、もう愛の人になりました」とか言つて、奥さんに、「私はこれから愛の人になつてやる。お前を愛するから」なんて、そんなものは続きませんよ（笑）。

世間的に言いましても、本当に愛の中で育つた子どもさんというのは、やはり愛情深い人間になつていくと思います。ところが、そうでない家庭に育つた人はやはりどこか暗かったり、ひがんだり何かする。愛されている者がはじめて人を愛することができる。新しく生まれなくても、一般に言える。ましてや、我々は神さまに愛され、しかもその神さまの愛によつて愛されるということは、十字架で古い自分はもう片付けられて、新しい生命をいただく。聖霊の生命をいただく。変身して生まれ変わる。そうすると、神さまの、キリストの愛が流れてきて、キリストの霊が宿る。キリストの霊が人を愛さずにおられないようにしてください。たとえ相手がこつちを向いてくれなくてもいいんだよと。

キリストは与えるだけなんだ。キリストは一方的に与えるばかり。それが本当の愛な



んです。お返しを、見返りをもらうようなことではない。太陽を見てごらん。太陽は悠久の昔からずーっと照り続けて、地球を生かしてきた。地球は太陽に対して何一つ恩返しをしていない。そうでしょ。無神論者であろうが、何であろうが、

「善き者にも悪しき者にも陽を昇らせ、雨を降らせ給う」

と、キリストは言われる。その太陽という存在そのものが地球を生命付けてきた。地球はそのことを知らない。神さまはそのような一方的な愛で我々を愛してくださっている。「神に従い、神を愛する」と言えば、喜んでほくださるよ。でも、何もそれを求めて我々は愛されたのではない。一方的に愛して、ご自分の生命を献げてくださった。それに気がついて変身しなければおかしいわけです。本当に気がついたら、こんなに有り難いことはどこへ行ったらあり得ない。どんなに金を積んだってだめです。無条件に、

「ありがとうございます。どうぞ、あなたと同じように人間として、これからは用いてください」

と。なるべく早い時がいいですよ、若いときが。長いから。80歳になってやっと気がついたら、もうあとは短いもの。そうでしょ。それは気がつくほうがいいですよ。私は老人ホームへ行つて、皆さんにお話して、

「今からでも遅くない。またしばらくの間、お互いに愛しあつて、素晴らしい生活を送つてね」

と言いたけれども、願わくはやはり若い時にそういうものに目覚めて生まれ変わったたら、あと長い間、神のために働けるもの。神さまの栄光を現わせるもの。そうなんですよ。ですからやはり、若い人にこの福音に接してもらいたい。我々の願いは、祈りは、

「どうぞ、主よ、今の日本はこのままではだめです。本当に若い世代に本当の生命を分かち与えることができるように、我々をお用いください。我々一人ひとりを用いてください」

と。我々はそのためにこの地上に存在しているんですよ。我々は、新しく生まれ変わつて、もう天国への資格をもらつて、パーツと向こうへ行ったら、それは楽でいいですよ。でも、それはあかん。やっぱりこの地上で使命を果たさないといかん。私はやっぱり使命を果たして向こうへ行かないと、向こうへ行つて恥ずかしいよね。

「あなたは地上で何をしてきたの？ 私がいなくなつて淋しい気持ちはわかるよ。でもね、淋しい淋しいで10年間、何をしていたの？」

と言われたら格好わるいでしょ。やっぱり私は淋しいですよ、正直言つてね、一緒にいた人間がいけないというのは。「いや向こうにおるよ。きつとそばにおるよ」とか、人は言いますよ(笑)。でも、現実にはおらんからね。でも、やっぱり私は向こうへ行くまでのあいだ、しっかり仕事をして、「これだけでもやりました。恵みによって支えられてやりました。日々、鷲の如く新たになつてやりました」と。それを持つて向こうへ行かないと、恥ずかしいで



すよ、それは。皆さん、そうなんです。キリストに出会って新しくされるということは、使命があるんです。その使命を果していくこと。皆さん、それぞれに使命があります。自分の使命は何だろうか。それを皆さん、それぞれにお考えいただいて、そしてキリストに「パワーをください」と祈る。使命を果たすためにはパワーが必要です。「パワーをください」と。するとキリストはくださいますよ。

「求めよ、さらば与えられん」

と。やっぱりキリストは、求めてくるのを待つておられるんですよ。求めて与えられたら、「ああ、与えられた。よし、やるぞ」と、相乗効果でぐんぐんそれは広がります。そういう生き生きとした生きさま、それを人は見ている。

「あの人は確かに変わった。表情だけではない。パワーが出てきた。あの人と一緒にいるだけで何かうれしくなるよ」

と。そういうふうな、いい働き、いい作用を他に及ぼすような、そういう存在。それを「香り」という。「キリストの香り」を発するとか。そういう存在になってこそキリストは喜んでくださると私は思います。

最後に祈りがここに載ってますね。これはエペソ書の祈りです。著者はパウロというふうに聖書ではなっています。学者は「パウロではない」と言ってますけれども、まあどうでもいい。

新約聖書の「使徒書簡」の「エペソ人への手紙」の一節に次のような祈りが記されている。

「わたしは膝をかがめて、天上にあり地上にあつて『父』と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る。どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるように、また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもつて、あなたがたが満たされるように、と祈る」。

ここに、「あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活する」とあります。これが今日の主題なんです。「愛に根ざして生きる」という題はここから持ってきた。我々の、新しく福音に、キリストの恵みによって新しく生まれ変わった時とは結局、この「愛を根ざして生きる」という生きさまをもって神の栄光を現わす。そういう存在であるということです。

それでは、これで終わります。

